症例報告2－Ⅱ①

「めまい」

心身条件反射療法協会
カイロプラクティックオフィスSEKI
院長　関　隆一

【患者】

四十代　女性
病院内勤務

【既往歴】

回転性のめまい感が数年前に発症したが、その後再発はしていないとのこと。また季節の変わり目に必ず「涙、鼻水、クシャミ」の三大症状がでる酷い花粉症だったが、当院にてPCRTの施術にて全快。以後、症状は出ていない。

【主訴】

前触れもなく突然のフラフラ感がでて家事や業務に支障が出たとのこと。今までには無いめまい感だった。

【めまいの分類】

『めまいとは、自己と外界との間の相対的な位置関係について不調和感を感じている状態をさす。これは自分自身ないし周囲が回転するような運動感を伴うもの（真のめまい、ないし回転性めまいvertigoという）と、これを伴わないもの（めまい感dizzinessという）とにわけられる（必修内科学 改訂第五版 南江堂より抜粋）。』

・回転性めまいについて

関係がある病気はメニエール病、突発性難聴、内耳炎、前庭神経炎、内耳循環障害などが挙げられます。

・非回転性めまいについて

関係がある病気は小脳や脳幹の出血、脳梗塞、脳腫瘍、一過性脳虚血発作、第八脳神経腫瘍、椎骨脳底動脈循環不全などが挙げられます。

今回の場合は目が回っていないので「非回転性めまい」ということになります。メニエール病のように耳が聞こえ難いこともないので間違いはないと思います。

【神経学的システム（概略）】

人がフラフラしないで平衡感覚を正常に保つには前庭系、固有感覚系、視覚系のシステムが必要です。ここでは特に前庭系を考えてみます。前庭系は両側の側頭部の内側にある卵形嚢と球形嚢と三つの半規管（三半規管）から成り立っています。三半規管は内リンパで満たされていて頭部の動きによりリンパの流れが生じます。そして三半規管（前半規管・後半規管・水平半規管）はそれぞれ卵形嚢と接続しています。また卵形嚢は球形嚢に接続していてリンパの流れの情報を伝えます。これらの器官には受容器があり頭の位置がどのような状態なのかをモニターして情報を中枢へ送っています。これらの情報の伝達は眼球や筋肉を最適な状態に働かし、頭の保持や運動に関与して平衡感覚を保っています。

（三半規管について）

それぞれの半規管の膨大部には感覚器官である膨大部稜があります。膨大部稜に有毛細胞が集まっていてそれをゼラチン質の小帽が覆っています。頭部の動きによりリンパに流れが生じるとこれが倒れて有毛細胞が興奮します。その興奮の情報が伝達されます。頭部の回転の動きが右方向ならば右側の三半規管が興奮して反対側の三半規管は抑制されます。

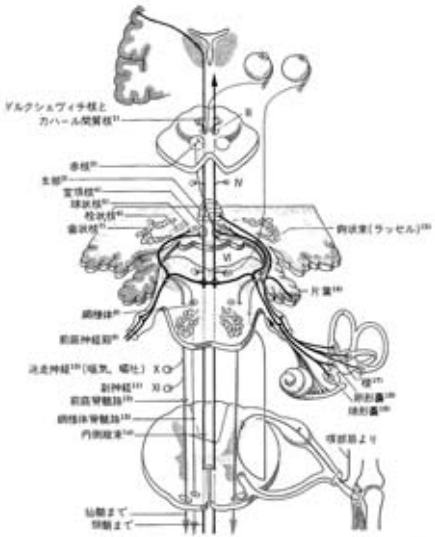
（卵形嚢と球形嚢について）

卵形嚢と球形嚢はそれぞれ平衡班を持っています。平衡班にも内部に有毛細胞があり、それを耳石膜が覆っています。重力や直線的な加速度が加わるとこの耳石膜は変位して有毛細胞が興奮します。無重力の宇宙空間で起こるいわゆる「宇宙酔い」に関与していると言われています。

これらの前庭器官のそばに前庭神経節があり中枢と末梢の双方に向かう細胞があります。末梢枝は膨大部稜と平衡班へ向かい、中枢枝は前庭神経核へ向かいそこから眼球運動に関する神経核や大脳皮質、小脳、脊髄に情報を伝えていきます。

つまり、前庭器官一つにしても脳をはじめ身体の各部と複雑なシステムで密接に関わっており、非常に緻密な制御が行われているということです。

（検査法、結果は次号へつづく）



【参考文献】

「改訂第四版　神経局在診断」
文光堂刊